

We Love 丹沢

ほ ぜん さい せい
保全と再生をめざして

たんざわ おおやま そうごう ちょうさ
丹沢大山総合調査ニュースレター 第4号 2006年2月



「親子（鍋割山頂東側）」

（写真：横浜市 福島コウ）

みんなの声 ～人材バンクご登録の方々から～

寄で中津川調査に参加し、魚と川底動物の多さ、水の綺麗さ、自然と調和のとれた姿に心底いやされた。このまま維持できるよう、公私とも努力が必要である。

（横浜市 百瀬正勝）

ゆめ馳せし 峰の高さや

夏はたち

はたちの夏休み、丹沢に登ったとき、まだ見ぬゆめを夢見たものです。若かったのですね。三十年も前ので、これはわたくしの青春譜です。

（横浜市 金子詔二）

丹沢を知りたくて出発。調査時、ムササビの巣との出会い。猿の糞の行列に感激。自然の営みを感じられた。自然のすばらしさを体感。一方的に人の都合ばかり押しつけてはいけないね。

（秦野市 Sさん感謝）

【協 賛】 サントリー(株) / トヨタウエイズグループ / (NPO法人)丹沢自然保護協会 / 東京電力(株) / (株)有隣堂 / 相模鉄道(株) / 小田急電鉄(株) / 神奈川県農業協同組合中央会 / IBS石井スポーツ(株) / 神奈川中央交通(株) / (株)カモシカスポーツ / 和英堂興産(株) / (株)コージツ / (財)神奈川県公園協会 / (財)かながわトラストみどり財団 / (財)宮ヶ瀬ダム周辺振興財団 / 神奈川県治山林道協会 / 神奈川県丹沢大山総合調査の趣旨を理解し、資金面のご協力をしてくださる企業・団体・個人を募集しております。みなさんのご協力をお待ちしております。

丹沢大山の健康診断

丹沢大山総合調査では、丹沢大山の健康状態をいろいろな角度から診断しています。そこで、今回は、その診断状況を各調査チームから報告していただきました。

丹沢の森は病んでいる

地域再生調査チーム 富村周平



下草などが無く病んでいる人工林



色々な草木が生えている健康な人工林

森は私たち命の源です。森からの栄養分を川に流し、川の生物を育て、田畑を潤し、海の生物を育てます。そうして育った生物が私たちの食べ物になっています。そして、神奈川県の中で県民の飲み水のほとんどを提供してくれるのが丹沢山地の森です。でも長い間手入れが行われずに森は荒れています。明治時代の初めまでは、一つの絶滅動物も出さなかった私たちの暮らしが、ここ50年で急速に変わってきました。特に、石油を大量に使った便利な生活が森とともに生きる暮らしをなくしてしまいました。森の手入れは大変な仕事、神奈川県という大都会では森で働かなくても他の仕事で十分豊かな生活ができるようになりました。そうして手入れが遅れると森は荒れ、森が荒れると山の土が流され、川の水が濁り、また大雨では洪水を

起こします。外から見れば立派な森も一歩中に入ると、太陽の光が届かず暗くて、植物や動物のいない砂漠みたいな状態になっています。丹沢山地の中でも、人が植えた森と山里の森が最も荒れています。

畑で間引いて丈夫な野菜を育てるように、森も弱った木を間引いて、そして太陽の光を森の中まで届くようにする、そのような健康診断を行い、丹沢の森の治療を今行いつつあります。

生きもの同士の関係 (シカが与える生態系への影響 丹沢編)

生きもの再生調査チーム



写真1 かつての堂平ブナ林(下にスズタケが密生している)「丹沢大山学術調査報告書(1964)」から引用。

神奈川の美林50選の一つである東丹沢堂平のブナ林では、1960年代は下にスズタケが密生していました(写真1)。それが、現在はほとんど見る事ができません(写真2)。その主な原因がシカに食べられてしまうためであることが前回の総合調査でわかりました。そして植生回復のために植生保護柵の設置が提言され、1997年から県の事業で柵が設置されています。

柵を設置したところではスズタケをはじめ絶滅種も回復してきたことが確認されています。このようにシカは餌となる植物を食べることで、植物に影響を及ぼしています。一方で植物は様々な生きものの餌、あるいは住処となるため、シカによって植物が減少することは、他の生きものにも影響が及んでいる可能性があります。



写真2 現在の堂平ブナ林(下はスズタケがほとんどない)

そこで、今回の総合調査生きもの再生チームでは、東丹沢堂平地区で柵の中(植生が回復してきたところ)と外で、植物だけでなく他の生きもの種類と量を調べています。例えば、地表性の昆虫では、柵内で種類や数が多いことが明らかにされ、予想どおりシカが植物以外の生きものにも影響を及ぼしていることが確かめられました。すなわち、シカは植物を通して直接・間接的にさまざまな生きものと関係しています。

シカも丹沢の生態系を構成する生きものです。現在、シカと生態系との良好な関係を築けるようにチーム内外で議論しているところです。



写真:横浜市 市川征彦

ヤマビル

山で遊ぶとき、気をつけたほうがよい生きもの

ヤマビルはゴカイやミミズの仲間です。体長は伸びた状態で1.5~8cmになり、体色は赤褐色、背面に3本の黒い縦じまが見られます。体の前後腹面に吸盤があり、人や動物に附着して吸血します。活動期は4月~11月ですが、6月~9月の雨や雨後は特に活動が活発になり、県内では東丹沢を中心に分布が確認されています。

附着を防ぐためには忌避剤や塩を靴下や靴に塗る方法がありますが、市販の虫除けスプレーは効果が短時間なので、持続性を高めたヤマビル専用の忌避剤も市販されています。吸血の際に血液が固まるのを防ぐ「ヒルジン」という物質を出すため、傷跡から出血が続きます。出血はやがて止まりますが、ごく稀に傷口から細菌類による感染を起こすこともあるので、抗ヒスタミン剤軟膏などを塗った後にバンソウコウなどで傷口をふさぐとよいでしょう。

(自然環境保全センター 登山用具のお店でヒル避けが売られています。)



下草の減少と、けんしょう 土壌と水どじょうの関係

水と土再生調査チーム 石川芳治

東丹沢の宮ヶ瀬ダム上流（堂平地区）にあるブナ林内の斜面で下草の減少が水や土に与える影響を調査してきました。ここではたくさんいるシカが下草を食べてしまうため、今では夏でも下草が見あたりません。

シカが入らないさく柵の中で、下草が地表の約80%を覆っている箇所（被度大）約40%覆っている箇所（被度中）と柵の外で下草がほとんど無い箇所（被度小）に、幅2m×長さ5mの枠を設置して、ここから流出する水と土の量を観測しました。2004年7月から2005年の11月までの観測では、下草の有無で大きく異なる結果となりました。下草がほとんどないと雨のたびに土壌が削られて、年間ではほぼ厚さ1cm分の土壌が斜面から流されてしまいますが、下草がある箇所ではほとんど流されていません（図-1）。また、下草が多い箇所では降った雨の約94%が地中に浸透しますが、下草がないと地中への浸透率は約73%となり（図-2）、残りの水は地表を流れて土壌を削ったり、洪水の原因になったりします。さらに降雨後は、下草が少ない箇所の深さ10cm、20cmの土は、下草が多いところの約2倍以上の速さで乾燥が進みます（図-3）。

このように下草が減少することにより土壌の失われる量が增大するばかりでなく、降雨時に地表を流れる水が増え、地中への雨水の浸透量が減少し、さらに土壌の保水力が低下します。言い換えれば下草の減少は森林の水源林としての機能を低下させていると言えるのです。

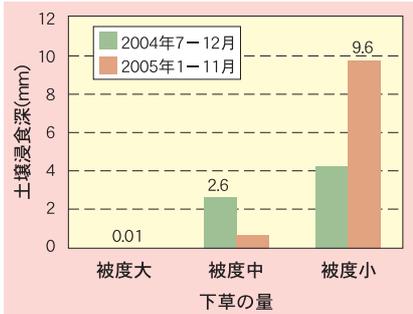


図-1 下草の量の違いが土壌浸食量に与える影響 (2004年7月～2005年11月)

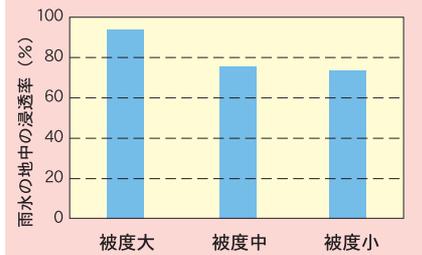


図-2 植生被度の違いが雨水の地中への浸透率に与える影響 (2004年7月～2005年8月)

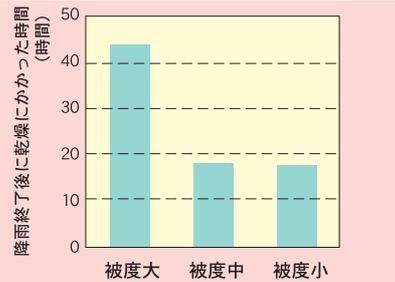


図-3 植生被度が降雨後の乾燥速度 (pF1.4からpF1.6になるのに要した時間)に与える影響 (2004年7月～2005年11月)

あとがき 山が蓄えている水が少なくなれば、川を流れる水も少なくなる。そして、私達が飲む水も少なくなる…。住んでいる場所から遠い場所にあると思っても、山は実は静かに私達の生活を支えています。ここでご紹介したことは、丹沢の山の中で起こっている問題の一部でしかなく、他にも様々な問題をかかえています。それらを無視して、将来の私達の生活は成り立たないでしょう。けれど同時に、丹沢には素晴らしいものがたくさんあります。良いところ・悪いところだけではなく色々な視点から、皆さんも是非丹沢を探し、感じ、行動してみてください。

森のふれあい自然探検隊 in 丹沢

私たち（財団法人神奈川県ふれあい教育振興協会）は、キャンプや林間学校等で利用できる神奈川県立のふれあいの村（足柄・愛川・三浦）の運営をしています。今回は、丹沢大山総合調査実行委員会との共催事業の1つである、県立足柄ふれあいの村で行われた1泊2日のキャンプ「森のふれあい自然探検隊in丹沢」について報告します。

このキャンプの目的は、足元の小さな自然から丹沢という大きな自然まで様々な角度から「親しみ」、「学び」、「体験する」ことでした。参加者は県内の小学4年生から中学生までの37人。参加した子どもたちは、里山とのふれあいと大地の恵みを味わうために、自分たちで収穫したサツマイモでカレーライスを作ったり、秦野市の戸川公園で森を守るための間伐体験や自然観察等を行いました。

このキャンプをとおして、子どもたちは、「今の自然（丹沢）がどのような状況であるか」「野生の動物が必死に生きていること」「自然には多くの恵みがあること」などを発見することができ、自然を考えるきっかけになりました。

私たちは、これからも様々な自然体験活動（キャンプなど）をとおして、神奈川（丹沢大山）の自然について、その保護や保全の必要性をみなさんに伝えていきたいと思えます。

<丹沢大山総合調査実行委員会との共催事業>

1. 森のネイチャーキャンプ
2. ワンウィーク体験活動「山」
3. ふれあい指導者研修「足柄」
4. 森のふれあい自然探検隊in丹沢
5. 間伐材クラフト体験 このイベントに参加していただいた皆様の作品集を下記のホームページにおいて掲載しています。是非アクセスしてみてください。 <http://www.minnano-tanzawa.net/>



イラストコーナー

～人材バンクにご登録の方々から～



中津川調査：マス、ウグイ、アブラハヤ、カジカ等たくさんとれた。とにかく水が綺麗だ。

（横浜市・百瀬正勝）

地域のお話 ～地域再生調査チームからのたより～

住民組織で地域再生 「松田町 寄 地区」



「寄の食事体験」で食材生産を体験

国道246号線から「寄入口」で県道710号に折れ、溪谷沿いに10分ほど走ると突然視界が開け、街が広がります。この盆地の街が松田町寄です。この寄に、地域再生チームの働きかけで、住民自らが地域経営を行う“プロジェクトやどりき”が昨年8月に組織されました。昨年行った「寄の暮らし体験」「鳥獣被害対策現地シンポジウム」「親子で学ぶ寄の環境と暮らし」等に加え、2月から「寄ふるさと大学校」「寄里山再生」が始まります。

(日本大学生物資源科学部 日暮晃一)

自然と人が関わる暮らし 川が運んでくる花嫁 「津久井町青根地区」

夫婦となる男女の出会い方には、いろいろなかたちがあります。ところが、かつての北丹沢地域の津久井町青根地区では、地区内もしくは道志川の上流に位置する山梨県道志村から、花嫁をむかえることがほとんどであったと言われています。青根も道志村もおなじ道志川の流域にあり、



かつては物資を運ぶなど、道志川をつかった行き来がさかんでした。このような交流のなかから、男女は出会い、夫婦となったのでしょうか。まさに、川が上流から花嫁を運んできたのです。

(日本大学生物資源科学部 栗原伸治)

青根地区からみた道志川とその北側に位置する藤野町大川原の集落

丹沢で見られる生きもの

丹沢に息づく芸術品

冬虫夏草「カイガラムシツブタケ」

晩秋の河畔林の調査で、調査員の常盤俊之さんがカイガラムシツブタケという大変珍しいキノコを確認されました。不思議なかたちに見えますが、角状に突き出しているところがキノコに相当する部分で、高さ1cmほどの小さなものです。

このキノコは「冬虫夏草」と呼ばれる昆虫寄生菌類の仲間、中心に丸く見えるのが宿主のカイガラムシです。良好な環境下に稀に発生する菌で絶滅危惧種に指定されています。(神奈川県立生命の星・地球博物館 出川洋介)



丹沢で姿を消しつつある魚 カジカ

カジカと呼ばれる生き物は、実は2種類います。同じ場所にすんでいるので、よく混同されますが、風流な声で鳴くのはカジカガエル、もう一方は、渓流の石の下に隠れる頭の大きな鈍くさい魚です。大きさは最大で10cmくらい、水生昆虫などを食べています。産卵期は初春、石の下に綺麗な黄色い卵を産み付け、雄が守ります。最近、県内では生息地が激減、主要な生息地である丹沢渓流域でも、特に東丹沢で姿を消しつつあります。ひょうきんなその顔からは、とても想像が付きませんが、水質汚濁や河川改修などの環境の変化にはとても弱い魚です。

(神奈川県水産技術センター内水面試験場 勝呂尚之)



*** ニュースレターに関するお問い合わせ ***

【発行元】

丹沢大山総合調査実行委員会 広報県民参加部会

【お問合わせ】

丹沢大山総合調査実行委員会 広報県民参加部会
横浜事務局 (神奈川県環境農政部緑政課自然公園班内)
〒231-8588 (住所不要)

TEL: 045(210)4315 FAX: 045(210)8848

e-mail: kouho.j-bank@minnano-tanzawa.net

URL: http://www.minnano-tanzawa.net/

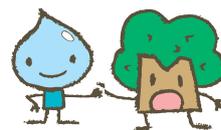
お待ちしております!

ニュースレターに関するご意見や、ご感想をお問合わせ先までお寄せください。また、丹沢大山にまつわる楽しい体験談も募集中です。みなさんの声をお待ちしています!

* 丹沢大山総合調査シンポジウム開催のお知らせ *

平成18年7月30日(日)新都市ホール(そごう横浜店9階)において、平成16年度から2年間にわたり実施しました丹沢大山総合調査の調査結果報告や、これからの丹沢大山との関わり方について話し合いを行うためにシンポジウムを開催します。

詳しい内容につきましては、今後丹沢大山総合調査ホームページなどで、お知らせいたします。



【表紙の写真】

鹿の親子としばらく時間を共にした秋の日
でした。撮影年月日:平成17年10月28日



古紙配合率100%再生紙を使用しています